

# 大地の芸術祭の取り組み

NPO法人越後妻有里山芸術機構 原 蜜

## 越後妻有

越後妻有は、豪雪地帯として知られる新潟県中越地方に位置する人口七万三千人の地域である。二〇〇五年の市町村合併によって、六つの市町村（十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町）が一市一町（十日町市、津南町）となった。南北を縦断する信濃川、地殻変動や川の流路変更などにより形成された河岸段丘、地域全体の六割を占める森林などによってもたらされる自然の恵みは、狩猟、採集、農耕などの豊かな営みを可能にし、縄文中期の火焔型土器に代表される芸術性、創造力をも育んだ。稲作を中心とする越後妻有の生活では共同性が礎にあり、地域全体で約二百の集落が形成され、田植え、稲刈り、水路や道路の管理、屋根の葺き替え、冬の除雪などが共同で行われてきた。戦国時代の落

人たちが逃れてきたという言い伝えもあり、山の斜面を開き、雪とけ水を利用する棚田、蛇行する川の流路をかって川床を利用した瀬替え田など、生活に対する尋常ならぬ工夫がうかがわれる。



棚田、雪

国が市町村合併を進めるなか、地域をおくすともに合併後の地域の将来像を描こうと大地の芸術祭を含む越後妻有アートネットワーク整備構想が一九九六年に立ち上がった。「人間は自然に内包される」という基本理念のもと、アートを媒介にして人と自然をつなぎ、人と自然の間わり方の可能性を越後妻有から提示しようという試みだ。構想の一つの事業として二〇〇〇年から「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭」を取り組みだした。国際芸術祭という性格を持たせつつ、世界のアーティストと住民の協働作業が展覧会の形で三年に一度発表される。これまでに四回開催され、会期五十日間で開催から十六万、二十万、三十五万、三十七万人の来場者を迎えている。

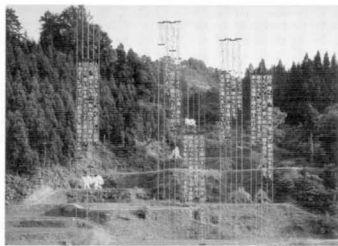
十年の取組みによって越後妻有には二百のアートが恒常的に設置されている。地域の棚田、里山、民家、河川敷などがアートによって生まれ変わる。道路整備、公園づくりなどの公共事業にアートが入っているものも少なくない。世界的な作家から新進気鋭の若手までさまざまなアーティストたちが地域に入り、過去から未来への時間の流れ、同時代の地理的な広がりのおかげで、この瞬間、この場所の特異性を浮き彫りにする。大地に

流れていた時間、風景、生活の営みが表現される。アートによる場の表現は地域に奥行きを与え、人を呼び込み、新たなコミュニケーションを誘発する。旅人との出会い、交流は住民が自己を認識するきっかけとなり、表現の意欲を生んでいく。

制作のプロセスでは、アーティストがプランを提案し、住民のさまざまな声、共同作業を受けて、実現化される。当初のプランから大きく変わるものも少なくない。雪に耐える構造、材料の調達、組み立て、手仕事など、住民の持ついろいろな経験、技術、知恵が発揮される場面は多い。作り手と鑑賞者という境界が取り払われ、作者をひとりに特定することが難しい作品もある。住民が完成したアートの守り人となるものも少なくない。アートは周辺の空間も取り込んでいるため住民は周辺環境の手入れにも動しむ。

下記は越後妻有を代表するアートのひとつであるが、苗代から稲刈りまで五つの稲作の場面を表した彫刻を百メートル手前のテラスからスクリーンを通して鑑賞する。スクリーンには五つの場面に対応した詩がかかれていて、棚田に置かれた彫刻と重なって立体絵本のようになる。田んぼの持ち主である福島友喜さんは当初作品制作に反対していたが、作者のイリア・エミリア・カバコフとアシス

タントの情熱と努力に根負けして田んぼの貸し出しを承諾する。余談ではあるが、福島さんは二〇〇〇年にはやめようとしていた田んぼを二〇〇六年まで続けた。その後の耕作はNPOを中心に都市住民のネットワークへと引き継いでいる。

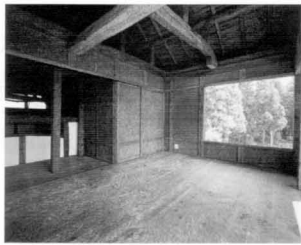


イリア・エミリア=カバコフ「棚田」©S.Anzai

十日町市願入地区にあるうぶすなの家は五軒の集落に日本を代表する陶芸家が力を結集し、将来を見据えた地域の食と生活文化を体現する施設に生まれ変わった。食材は全て、山から調達し、化学調味料を極力使わず、陶芸家の器でご飯を食す。スピード、利便性に傾きすぎた現代に対するカウンターになっている。

松代星峠では、民家そのものが彫刻と

いうコンセプトで日本芸術学部彫刻学科有志によって一軒の家の壁、床、天井が彫刻刀で掘られている。脱皮する家と名付けられたこの施設は、貸し民家として集落の夜も体験できる場となっている。



日本大学芸術学部彫刻コース有志「脱皮する家」

十日町鉢にある真田小は二〇〇四年に廃校になった。作家の田島征三は、閉校時の三人の在校生を主人公とした物語が校舎全体に展開する立体絵本を創作した。校舎の入り口にある湧き水で動くシオドシは、体育館に吊り下げられた流木でできたオブジェの動力になっている。三人の小学生がお化けと戦いながら成長していく物語だ。



田島征三「絵本と木の美術館」

©Takenori Miyamoto + Hiromi Seno

ること。いわゆる物見遊山の旅を越えてふるさととして地域づくりに関わる人々を増やすことである。第二に、夏場の里山と冬場のあたり一面の雪の世界をいかした晴耕雨読、夏耕冬読の世界の構築である。自然と関わるなかで食べ物をつくり、自然素材から生活用具をつくりだし、本物の学問を学び、地域にあつて世界と向き合う力を養いたい。第三に、見方を変えれば可能性の宝庫でもある空き家、棚田、廃校を活かした外部ネットワークの誘致である。

限界集落という言葉がある。六十五歳以上の人口が地域の半数を占めると言うのだそう。越後妻有でも約五十の集落が当てはまる。限界集落の次は超限界集落、そして消滅集落。一見説得力のある考え方だが、地域の将来に起こりうるさまざまな事象を捨象し、歴史を単線を描いた見方である。年齢別人口という一面だけでは地域を捉えることができない。六十五歳で人生これからだといって未来を描く人たちもいるのだ。こうした指標だけはやめたほうがよさそう。

ラスコー、アルタミラの洞窟画の例が示すように、アートの根源は自然（自己の内にいる自然、外部の自然）との対話とその表現であったが、美術館の誕生とともに、美術の有りようは大きく変わっていく。ホワイトキューブ、均質な空間のなかで、美術のスタイルが規定され、生活から遠くなっていく。越後妻有で生まれた作品群は、アートを里山と生活世界に誘い、その縛りから解放したといえる。

最後に越後妻有が今後目指すべき方向性を示したい。第一に旅のモデルをつく

もともと限界集落というのは人間が住める高度、距離の限界を設定した用語で、辺境・フロンティアの意味なのだ。越後妻有も自然の三重苦（平地なし、地すべり地帯、豪雪）を負った場所であり、人

が暮らすのにはそれなりのわけがあった。戦国時代、戦いに負けた者たちが逃亡の果てに辿り着いた、権力者の眼が行き届かないアジール、理想郷でもあった。

信濃川がもたらす自然力を背景とした越後は、逃亡者を受け入れ、見晴らす限りの土地を田圃にし、明治には日本には日本の全人口の六%を養うまでになっていたように、他者を受け入れる辺境のしなやかさは、強さへと変わっていった。

辺境は行き止まりではない。価値観を断定せず受け入れ、時間をかけて消化する辺境地域は、さまざまな価値観が同時に存在する特異性を武器にして他地域とつながることができるのだ。芸術によってさらに多様化された辺境の価値観は、生理、安心、コミュニティ、自我、自己実現といった人々が抱くさまざまな段階の欲求を満たす場を提供し、多くの人々に開かれた自由を感じさせる場をつくる。

越後妻有は、わずかな強者に照準を合わせた社会のなかで違和感を感じながら生きる者にとつての希望の在り処でもある。越後妻有が目指すものは辺境の混在郷である。

二〇一二年大地の芸術祭にむけて活動が本格化しようとしている。多くの人々の参加と協働を願いたい。

## 《チケットの販売》

Jネット事務局では「大地の芸術祭作品観賞パスポート」の前売り引換券を販売します。

一般 3,000 円（税込）です。（当日売 3,500 円です。）

ご希望の方はJネット事務局までご連絡ください。

電話：03(6515)6277 FAX：03(6415)6299

大地の芸術祭ポスター

**ECHIGO-  
TSUMARI**  
ART TRIENNALE 2012

**大地の  
芸術祭**

えちごつまり  
越後妻有アートトリエンナーレ 2012

2012.7.29.SUN - 9.17.MON

www.echigo-tsumari.jp

